香港便り その34

白鳥の湖

文 高野 陽年
text by Yonen Takano

バレエと聞いてまず頭に浮かぶとしたら、白いチュチュをきたバレリーナが踊る「白鳥の湖」ではないだろうか。バレエを観たことがない方でも白鳥の湖の名前くらいは聞いたことがあるだろう。

王子ジークフリード（善）と悪魔ロットバルト（悪）によって白鳥に姿を変えられた王女オデット（善）との悲恋を善悪で分けながらシンプルに描いた作品で、19世紀末のロシアでチャイコフスキーの作曲によって誕生し、幾度も改訂を重ねながら現代までバレエの代名詞として世界各地で上演されてきた。僕もロシアで群舞として、ジョージアでジークフリードとしてデビューし、今回香港で3作品目の白鳥の湖を踊る。

香港バレエのそれはウクライナ生まれで、ロシアでスターとして活躍した後アメリカに移ったユーリ・ポソホフという振付家の新制作だ。

特に現代において白鳥の湖は大きく変化した。女性ダンサーの象徴であった白鳥が男性に変わり同性愛の解釈が生まれたり、精神病棟の中の物語として再構築されたりと多くの振付家がこの作品に取り組んできた。しかしポソホフはロシア育ちの振付家であり、かなり古典の白鳥を踏襲している。ロシアの伝統に身を置いたものとして奇抜な改訂をすることを躊躇したのかもしれない。では香港バレエ版は今までの白鳥の湖と何が違うのだろうか。

時に古典バレエは女性を男性の目線でセクシャライズした芸術だと批判されることがある。それもそのはずだ。男性振付師が男性の観客のために創作したのが古典バレエである。物語も男性の都合で語られているのだ。バレエだけでなく19世紀のヨーロッパではいくつか白鳥を題材にした詩などがマラルメなど当時の一流の詩人によって描かれているのだが、白鳥＝女性を性的象徴として捉えられている。いずれも美といった定義し難い観念によってカバーを掛けることによって男性の目線を正当化しているのだ。ポソホフはヘテロセクシャルでロシア育ちの振付家としてそれを認識している。ポソホフ版はバレエの象徴的存在である王女オデットよりもジークフリードにスポットライトを当て、ジークフリードのキャラクターを（善／悪）とすることでオデットを自らの狂気が理想化した美という幻影的存在にした。男性目線によって理想化された美を狂気として描いているのだ。

確かに奇抜な演出ではないかもしれないが、古典へリスペクトをしつつ、現代の観客の価値観に寄り添おうとした新しい古典である。

以前のジークフリードは女性ダンサーを際立たせることが仕事で体力的には余裕があった。だがポソホフ版では死ぬほど踊らされる。スポットライトを浴びることは獅子座の僕としては悪くはないが、ここまでつらかったのか。少しライトの量を返却したいと思う、リハーサルの日々が続く。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。ヨーロッパ、北米、日本を含めさまざまな劇場における公演で主役を務めた。そして2021年7月より香港バレエ団に活動の拠点を移し、さらに活躍の場を広げている。立教大学中退。